福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI
REPOSITORY

小学校教員養成カリキュラムの再考2：社会や自然認識の発達に依拠した生活科カリキュラムの再考を通しで

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 和雄, 松木, 健一, 山田, 吉英, 大山, 利夫, 寺尾, 健夫, 橋本, 康弘, 大西, 将史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10400

福井大学初等教育研究　2017，第4号，pp.67－78

報告

小学校教員養成カリキュラムの再考Ⅱ
― 社会や自然認識の発達に依拠した生活科カリキュラムの再考を通して ―

福井大学大学院教育学研究科　小　林　和　雄
福井大学大学院教育学研究科　松　木　健　一
福井大学教育学部　山　田　吉　英
福井大学教育学部　大　山　利　夫
福井大学教育学部　寺　尾　健　夫
福井大学教育学部　橋　本　康　弘
福井大学教育学部　大　西　将　史

本研究は，本学の教員が協働で探究した「生活教材研究」のカリキュラムデザインと，その授業実践記録をエスノグラフィー法を用いて詳細に省察し初等教育における生活科の指導の在り方について考察した拙稿『小学校教員養成カリキュラムの再考Ⅰ』に続き，主に社会認識と自然認識の発達に着目して再考した実践報告である。

キーワード：生活科，カリキュラム，社会認識，自然認識，授業記録

1．はじめに

本研究は本学の教員が協働で探究した「生活教材研究」のカリキュラムデザインとその授業実践記録をエスノグラフィー法を用いて詳細に省察し[(1)]，初等教育における生活科の指導の在り方について考察した拙稿『小学校教員養成カリキュラムの再考Ⅰ』に続き，主に社会認識と自然認識の発達に着目して再考した実践報告である。

拙稿のⅠでは，本学の「生活教材研究」の授業における松木の子どもの成長発達の視座から生活科本来の在り方や授業の作り方を探った講義録を省察し，主に三つの知見を得た。まず生活科は「ものの考え方のフレームが大きく変わる時期の子どもたちに対する学習」であること。次に生活科では，学校種のフレームへの不適応が原因で起こる小1プロブレムを解消するため，幼稚園や保育園で行われている体験で味わったものを物語る等の言葉で味わい直す学びを促進することが求められること。そして，言葉で味わい直した学びや気づきの質を高めるために，生活科の教科書には，他者や対象との対話を繰り返し，発意，構想・構築，遂行，省察の学びのサイクルを拡大していける工夫があり，それらの細かな配慮が読み取れれば質の高い授業ができるようになることの三点である[(2)]。

本稿では全15コマのカリキュラムの内，5コマ目以降の社会，理科の教員の講義，演習，附属小の生活科授業の参観等の講義録の省察を通して，上記の三点以外の社会認識や自然認識の発達の視座から，生活科本来の在り方や授業の作り方に有用な知見を探る。

2．方法

平成28年度に7人の筆者らが協働で行った全15時間の「生活教材研究」の授業全てについて，小林と山田が中心にエスノグラフィー法による参与観察を実施して得られた講義録を，小学校教員養成カリキュラムのひとつである生活科の指導の在り方や授業づくりについて前稿「小学校教員養成カリキュラムの再考Ⅰ」と同様に省察する。

松木に続く寺尾，小林の講義を中心に報告する。また，授業者本人の了解を得て，小林が余談などを省き，授業者がそれぞれが担当する分野における生活科の在り方に関する指導の要点だけに絞って編集した。

3．結果

（1）平成28年度「生活教材研究」のカリキュラム

受講者74名，6名×11班，4名×2班　計13班
1時間目：担当教員紹介，グループ編成，ガイダンス
（松木，小林を中心に全員）
2時間目：発達からみた生活科の自己認識　演習
（松木）　グループディスカッション　学びとは何か
3時間目：発達からみた生活科の自己認識　講義
（松木）
4時間目：発達からみた生活科の自己認識　講義
（松木）
5時間目：社会科からみた生活科の社会認識　講義
（寺尾）
6時間目：社会科からみた生活科の社会認識　演習
（寺尾，橋本）町探険　福井大学周辺の散策
7時間目：社会科からみた生活科の社会認識　講義
（寺尾）

8時間目：理科からみた生活科の自然認識　講義
（小林）
9時間目：理科からみた生活科の自然認識　講義
（小林）
10時間目：理科からみた生活科の自然認識　演習
（小林，山田）動くおもちゃ作り　紙コップロケット
11時間目：附属小学校の生活科の取り組み
（小林，大山前附属小学校長）
12時間目：附属小学校の生活科　授業参観
（大山，大西を中心に全員）
13時間目：福井県の保幼小接続の取り組み
（觀 寿子　福井県幼児教育支援センター指導主事）
14時間目：「生活教材研究」の振り返り
（山田）
15時間目：振り返りの交流とまとめ
（小林を中心に全員）

（2）授業記録の詳細　※下線強調，編集は小林

第５回　2016/05/12 子どもの社会認識の視点から

（寺尾１）

今日から3回にわたって生活科と社会認識という話をしたいと思います。最初に「生活科の単元構成」を見てください。生活科はなんで1, 2年生だけにあるのかというのも含めて，3, 4，5, 6年を見通して生活科の意味と社会認識ということに焦点を当て，どういう力を子どもたちに育てようとしているのかを説明したいと思います。上の段が1年生，下の段が2年生となっていますが，どういう単元が社会認識に相当しているのかを説明します。生活科は自己認識，自然認識，社会認識の3つの認識を育てようとしている。中心は自己認識で，その中に社会認識と自然認識があって，究極は自己認識だという考え方が，わたしはいいかなと思います。単元構成を4月から追ってみると，自己認識も関わっている。楽しい学校という単元があって，「友だちを作ろう」の中心は人間関係ですが，社会認識でもあり，自己認識にも関わっています。

それから「学校探険」。校内にどんな施設や部屋があるかを探険して見ていく学習です。学校の中には保健室や給食室があったり，理科室があったり，図画工作の部屋があったり，郷土歴史資料室があったり，特別教室がある。1年生から6年生まで各クラスの教室がありますね。メモするようなものを持ってこれらを探険し，教室に戻ってきてから地図に表すと地図ができる。それは空間認識で地理の初歩になるし，保健室に中まで入れてもらうと臭い消毒液の臭がしたとか，ベッドがあったとか，先生が白衣を着ていた，ピンセットがあったという体験をします。それで「その先生は何をする人なんだろう？」と問えば仕事の学習に関わってきます。学校という小社会の中で，保健室の先生が自分たちに仕事をしてくれる人だということで仕事がわかる。給食室には大きな羽釜とかでかいハンドルで回して傾けたりするような米を炊いたり，おかずを調理したりする調理器具があります。大きい，それから巨大なしゃもじがあったりする。これも「どんなものがあったか？」「食べ物を作ってくれるところだ」「ここの人も白衣を着ているな」と，見たものをもとにして「何をやっているところかな？」材料を仕入れて調理して，昼に皆の給食を出してくれるところだ。調理のおばさんがいて道具を使って原料を調理して，という一連の仕事があることが分かります。こういった社会認識に関わりますね。これは重要で，あとあと3,4年生，稲作とか，地域の工場訪問とかを学習しますが，人がいて原料があって道具・機械ですね，製品，生産物がある。こういうことの基本，生産の基本要素が分かるというのは社会認識につながっています。原料があって，これに人が手を加え，加工して物ができる。学校で働く人を実際に見て社会認識につなげます。

通学路の探険。これはひとりひとりの子どもの通学路をたどるというよりは，皆がよく通る所を探険して何があったか，絵地図を作って，ということで社会科的な学習につながります。（※中略）

次の2年生です。1年生の4月は，学校がフィールドでした。2年生はそれを広げて町としています。マップもより高度になってきます。学校探険というのも学区探険に変わり，1年生の時は無作為に学校の中を探険したけれど，2年生では計画を立てる。これは社会をリサーチする調査の方法の技能という面でレベルが高くなっています。（※中略）

12月，年賀状。郵便局はどうなっているのか，ごっこ遊びして体験する学習。郵便の仕事という公共の仕事ですね，ここで公共の仕事の導入がされます。1年生と，2年生，その月に何を学ぶかが対応している。発達段階を考えて，1年生はこれくらいまで，それを踏まえて2年生の4月から同じ月に対応させて同じようなテーマでもう少しレベルを上げて子どもたちの能力を伸ばそうと考えられています。

●発達段階

1年生と2年生の認識がどう違うか，昔筑波大学の附属小学校にいた，社会科を中心に研究した有田和正さんが，附属小学校の子どもたちを何年も受けもった経験を踏まえて作った資料です。この学校ではずっと持ち上がりで同じ子どもたちを受けもつので，一人の子ども，集団としての子どもの特徴をよく観察してつかめているのではないかと思います。ただ附属小学校は少しレベルが高いと思う人が多いと思いますが，確かにそれはあって，認識の特徴，学年ごとに示していますが，普通の公立の子ども達よりやや高めだと思ってください。

いくつかの観点で見てみます。ひとつ目は追究の特色。ふたつ目は個性的思考。自己主張。それからイメージ。それから人間関係。最後に生活面の特徴。6年生まであ

るのですが，1, 2年生は分離せず，小学校という中で見ると，1, 2年生がどういう位置にあるかがわかると思います。1, 2年生でやっていることが，その後どう発達させるのにつながっていくか。分離して1, 2年を考えるのではなく，生活科は3年以降の学習に役立たねばならないとわたしは思っています。

（※中略）

●生活科は他教科に対してどういう位置にあるか。

1, 2年生に社会科と理科があって，生活科ができたと同時に教科としてなくなりました。社会科と理科は3年生からはじまるよね。小学校の教科を見ると，社会科，理科それから道徳その他の教科で，国語，算数，図画工作，音楽，体育ありますよね。生活科は実は社会科，理科がなくなって生活科になったんだというイメージで捉える人もいますが，いやそうじゃない，生活科の指導要領を見ても，社会科，理科の代わりではない。では3年生以降どのように繋がるのかがはっきりと説明されていません。そう考えると，生活科は国語，算数，その他全ての教科にも繋がるんだと考える。

（※中略）

仮説演繹の一連のプロセスが問題解決なのですが，1, 2年生ではまだ難しいので，その構成要素であるしっかり見る，出かけて行って足で調べる，記録をちゃんとしてくる，必要な物を探す，手に入れたものを比べてみる，比べた中から共通性とか違う所を見つけ出すとか，問題解決能力全体の中の構成要素ですね。それをしっかり育ててやるということです。1, 2年生でこそこれが重要で，個別の力は1, 2年生で発揮される。問題解決全体はまだ難しいから要素を伸ばして，その際，知識はいい。子どもが興味をもつテーマのもとでしっかり伸ばしておく。そうすると3年生以降，自然認識で予想を立てて確かめるとか，社会科でも調べて地域の特長を読み取っていくことが問題解決的にできる。個別にやっていた能力が結びついて，問題解決能力がはっきりと発揮されてくる。こういう段階的で能力育成的な生活科を考えたほうが生活科の意義はもっと出てくると思います。そう考えてください。ただし，1, 2年生の社会と理科はなくなっちゃったので，やっぱり接続は考えなくちゃいけない。図画工作や音楽への接続もそうですが。ともかく，生活科は要素的な能力の育成を大事にするということです。

第６回　2016/05/19　方法能力と問題解決能力の構造（寺尾２）

資料配布（学校教育研究会『学校教育』）

（「資料I　低学年での方法能力の構造」「資料II　問題解決能力の構造」を黒板で示す。）

今日は先週に続いて，低学年でどういう能力を伸ばすか。私の担当は社会認識ですが，小学校生活科では社会認識に関わってこれは必ず学習しておきましょうという規定はありません。学校によって子ども達はそれぞれ教材，学習の対象，テーマが少しずつ違っています。とはいえ，給食室で働く人，保健室で働く人など，仕事に関わることとか，決まり，学校の中の遊具の使い方のルールがあったりしますね。それから年中行事，社会文化的なもの，季節に応じた楽しみ方，景色，気温が変化して四季がはっきりある，季節に応じた衣服の工夫とか学習しています。これらを題材にしますが，必ず習わなければならないという決まりはない。1年生の生活科でこそ育てるものは，知識というか能力，思考力だけでなく，体を使って調査したり，物を見たりする力をしっかり育てておくべきです。それをやっておくと算数理科，他の教科でも学力を伸ばすのに繋がるし，発展が効果的になる。今日はどういう能力かというのを説明します。あとで配布した資料で，どういう場面で現れるか話をします。まず資料I，能力ですね。頭のなかだけでなく，五感を働かせる能力。見る，探す，実際に出かけていきます。手を動かします。石を触ったり遊具に触ったり，季節のものを見たり，衣類を触ったり。祭りの道具を作ったりするときに探す，調べる。それから聴く。人に訊いたりする。先生の話を聞いて色々調べる。これらは，五感を通して初歩的な能力といえるものだと思いますが，レベルがあって，物を見る，物を探す，物について人に尋ねるといった，形あるものに関するレベルもあれば，祭りのことを，眼に見えない事柄，これについて訪ねたり調べたりする。見えるものよりは少しレベルが高い。ものとか事，その上で関係をみつける。こうなると単に一つのものを見るとか探すだけでなく，わかったものが複数あって，その間の関係を見つける。自分でやる場合と，関係について人に聞くとか，調べるとかも，関係についてこういうもっと難しいレベルです。だから見る力を伸ばす，探す力，聴く力を伸ばしましょうと言っても，1, 2年生という2年間で，最初は簡単なもの。見れども見えずという言葉がありますが，大人からすれば当然わかっているだろうと思っていることを子どもが見ていないことがあります。逆に大人が気づかないことを見つけている場合もあります。子どもの視野，目の高さは大人より低いので。視点，角度から見ると大人が見ていないものを見ているかもしれないし，狭い生活範囲の中で，五感を働かせ，大人よりシャープに見ているかもしれない。視野が広がるとこだわらなくなるので，1, 2年生の頃こそ，見る力を働かせることが必要で，後々生きていきます。社会調査をしたり実験をするときに，漠然と見るのではなくしっかり変化を見取るとか。それから，このレベルからもっと関係が働いてきて，知ったものを分ける。複数，いくつもあるものを分類する。それから，その前に，比べるというのも同時にやるかな。比べる，分ける。そこにある共通点，相違点，類似点が何なのか，推理する。あるいは変化という中で，前と後の変化の因果関係を探る。それはかわったというだけでなく，変化をもたらした要素を推理するということなので，思考の

レベルがもっと高くなります。低学年はまだ心理学的には具体的操作の段階だと言われます。物を数えたりするのも，抽象的な数字よりはおはじきを並べて，具体的なものを手がかりに，何個になったか理解を進めるということで頭のなかだけでなくより対象を具体的にしながらでかけたり触ったり絵に書いたりしながら思考を進めていく。行動と行為と思考が一体となっている。そういう状態かと思います。こういう力を育てておくことが必要。指導する側はすぐに関係を考えさせたりするのではなく，段階として物をしっかり見る。ものからわかったことを関係づけて，同じところ，違うところ，前後関係，因果関係，段階を踏みながら育てていくことをする。それを頭に入れておく必要があります。

もう一つは問題解決能力。大人でも難しいですが，問題を把握して，回答を予想，仮説をたてる。どう解くか方法を考える。その仮説を検証していく。結果を，予想が正しかったかどうか，違っていれば，また違う回答を予想して考えないといけない。予想がほぼあたっていたなら一応の問題解決になる。これを大人はやりますが，社会調査をしながら，社会に隠れている傾向性を見つけ出していきます。1年生からやるのは難しいですね。これが後々育ってくるような基礎作りをする。能力の構造の際，外から問題解決をさせようと働きかけても内的な必要性は起こるものではないです。なんでと驚いたり，疑問を持ったり，焦点を当ててみてみようと言うところから始めないといけない。特に驚きを作って，驚きだけでなく，何でかなというのを問題として立てる。問題の前に，疑問，はてなを作る。だから問題解決能力の基礎作りを，するという視点を教師は持っておく。驚きを持たせる。何に向かって今から調べたりするのか。驚きを持って，疑問，何を疑問に思うのかな？それを解決するために，何をやっていったらいいかな？焦点を絞って，どうやって調べたらいいかな，どこへ出かけて行くとわかるかな。誰に聞くとわかるかな。自分も知識や経験で答えが分かる人に入ってもらうと，ああだこうだ子どもは予想を立てる。仮説までは行かないけれど，もっと柔らかい予想をしてみる。こういうことを学習の導入部分で，驚きや疑問を持つ部分を作って学習に入る必要があります。単に学習に引きこむだけでなく，問題解決能力の育成につながっているのだという考えで見て下さい。これをもう少し能力の所を整理して，内容じゃなくて，体を動かして調べることも含めると，方法に関する能力というのも含んでいますが，行動も含んでいる。どの教科にも共通するし，生活場面でも使う能力，読んだり，描いたり，表現，対話，記録，作図，物を利用する，学校の中で遊具を使う，掃除をするのに道具を使うとか，体育で運動するのに器具を使うとか，理科でいろんな実験用具を使うとか利用する。作る，育てる，飼育とか栽培をする。こういうのは生活的な方法的能力です。もうちょっとレベルが高まって，しっかり見る，観察とか，見学をする。町探険。工場見学。調べる，集める，探す。調査収集。比較分類。まとめる。整理統合。調べ方の計画。見通しを持って方法を考える。予想を立てる。実際に予想したことが正解かどうか，あたっているかどうかを確かめたり，実際にやってみる，試す。こういう力があります。これをしっかり育てる。（※中略）

資料は用意しませんでしたが，学校探険をしていて，学校の様子をつかむ。なかなか自分の教室と発見してきた場所，理科室，トカゲの剥製みたいなのがあった，人体模型図があった，こういうのは子どもの好奇心を捉えます。どこにあったか，教室を出て廊下を右に行って，階段を上がって，また右に行ったのだというのが，子どもによって見取り図が違う。廊下はどこにあったのか，学校の見取り図を描いて，例えば教室がここにあって，理科室が上の階の，ここらへんにあって，廊下はどこにあったかな？ランドマークに当たる廊下みたいなものを基準にさせると，ああなるほどといってわかる。だからランドマークを基準にすると空間認識がよくできる。ランドマークが必要なんだなとか。教室を表したらどういうマークにしたらいいかな。その特徴を代表するマークを考えて地図にするとかできます。そういう中で見てきた特徴を抽象化してマークにするという力も育っていきます。空間認識のものさし，基準を与えると空間認識がよく分かる。これはランドマークを空間認識の道具に使い，ランドマークになるものを手がかりにするとよくわかるということが子どもに育つ。分かり方の方法が育ちます。

残り30分あるんですが，生活科のビデオを見てもらいます。（※中略）しっかり見るとか，使い方，どういうものかを分からせるようにどう指導しているか見て下さい。（※ビデオの視聴　略）

これは学習の始まりであって，その先に見えないもの，つまり安全にどう気をつけているかという工夫がこの後だんだん生まれています。バスの運転手さんはいくつの鏡を出発するまでに見ているか，知っていますか？右前から乗客が上がってくれば，最後本当に誰も居ないか。はさまっていないだろうか，こう見て，こう見て，鏡に映った鏡をまた見て，これはすべて安全，運輸，人を運ぶのは特に安全に，早く，運送業の工夫の核になっているものがあります。それがいくつなのか，どこを見ているのか，どんな鏡がどう働いているか，だんだん見えないモノがわかるようになる。こういう子どもに社会の仕組み，工夫，その掴み方を知る方法を学んでもらう。特にここの驚き疑問，視点，子どもが反発したり，無理なことを聞かれて困るとか言うんだけれど，日常見れども見えずというものを問いのかたちでつきつけられると，子どもたちは一生懸命になるし，この後授業終わってバスにのるとき，メモしたりしてタイヤの数，つり革の数，座席の数，先生に負けるかというのも働いて，一生懸命調べてくる。調べる力を伸ばすのにつながっていきます。

こういう学習が2年生の社会認識に関わります。学校の中でも消火器がどこにあるか，給食室は火を使うから多いし，消火器の数，どこにあったか，位置とか，消火器はだてに置かれているわけではないことが分かります。理科室とか多いね，とか。こういう空間を学校とか，1，2年の間，日本全体の広がりではなく，足で出かけられる広がりの中で育てられるということですね。次の時間，みなさんがどれだけできるかということで，問題を用意しますので，大学の回りに実際に出かけて行ってもらって，調べてきてもらおうと思います。何があったかだけでなく，どういう理由があってそうなのかも。報告レポートを出してもらおうと思います

第７回　2016/05/26　大学周辺探険（寺尾３）

●資料配布（生活科と社会認識課題，（別紙）Googleマップ　福井大学周辺の地図）

大人なんだけど子どもの立場になって，とはいっても大人なので大人のレベルで良いので，大学周辺を探険して，これまで2回にわたって話してきたことを実際にやって，社会認識に関わる生活科の認識をやってもらおうと思います。（※中略）

生活科だから色々テーマとか分かる内容はこれだ，これを見つけなさいとは言いません。自由に，面白いもの，はてなが見つかるものを見つけてください。それがどういうふうに力を伸ばすことになるか。方法的能力や能力発展の仕組みに触れながら説明してください。なんでも鑑定団のセリフ，いいしごとしてますねぇ，という作品に対する言葉，こんなのすぐ見つかるじゃないかというものではなく，なるほどこういうことが隠されているのかといった見れども見えずの秘密を見つける。いつも見ているのに見えていなかった，そういうものを見つけてきてください。難しいことを言っているなと思うかもしれません。例えば大学の門，守衛さんがいるところ，あそこに信号機がありますね。おそらく名古屋とか太平洋側から来た人は変わった信号機だなと思います。信号機がこうあるけれど，LED，になっていますね。横から見ると，たいてい上が前に傾いていることがわかると思います。これ薄っぺらい。LEDだからかというとそうではなく，おそらく太平洋側だと，横から見たらひさしがあって，本体がLEDになっていなければすごくでかいと思います。これは雪国だからです。雪が積もって重みがかかると負荷がかかるので，いち早くこういう形になったと思うんですが，こういうのがなるほどです。いつも見ているけど工夫があるんですね。こういうのを見つけてもらえたら。道路にあるかもしれないし，歩道にあるかもしれないし，店の中にあるかもしれないし，大学周辺，どこでもいいです。色々工夫して見つけてみて，子どもにどういう能力が育つか考えてレポートに書いてください。今日はもう戻ってこなくて構いませんから，交通事故とかあわないように気をつけて行ってきてください。

●次回の予告と学習指導要領解説生活科を読んでハイライトしてくるという宿題についての説明（小林）

第８回　2016/06/09　生活科との特質（小林１）

それではまずテキストである学習指導要領を出してください。ちゃんと自分が気になる所，わからない所，線を引いてきましたか？では生活科の目標は何ですか？

授業というのは，狙いや目標があって，それに向けて色々やるものです。目標，狙いがわかってなかったら活動しているだけになってしまう。みんなちがってみんないい，そんなわけのわからない学習になっちゃうんですよ。はい，じゃあ，大きな声で読んでもらおう。

学生「具体的な活動や経験を通して，自分と身近な人々，社会及び自然との関わりに関心を持ち，自分自身や自分の生活について考えると共に…（略）…自立への基礎を養う」

これって全部暗記するのは難しいよね。要するに一番大事な所は，自立への基礎を養う。そこを覚えておくのが大事。途中はよくわからなくなっても，要するに生活科は自立への基礎を養う教科だぞ，そこを抑えておこう。じゃあ自立とは何だ？自立を知るためには，そうでない状態を知る必要がある。自立していない状態っていうのは，鳥で言えば鳥の巣の中でお母さんやお父さんが取ってくる餌を口を開けて待っている状態。学習で言えば，先生がまとめてくれないと自分が何を学んだか，意味づけたか，価値づけたか自覚できない状態。たとえば，授業の終わりに「先生，要するに今日は何を覚えればいいんですか？何を勉強したんですか？」なんて訊いてくる状態。これでは子どもが自分で振り返りなんか書けませんね。自分の言葉で，今日学んだことを捉えることができる。それが自立した学習者。みんなは本学の優秀な大学生だから，今日勉強したことは何か，振り返りを書けているでしょう。学習前に考えていたことと，学習後に考えがこんなふうに変わりましたよ。今日はこんな話し合いをしました。以前はこんなふうに捉えていたのだけれど，今日はこういうことに気づきました，分かりました。こういうことについても詳しく勉強していきたいな，と自分の認識をモニタリングし，メタ認知して振り返りに自分の学習プロセスを書くことが大事。

昨日，近くの高校に行ったんだけど，総合的な学習の時間に，「研究」というのが始まっていて，自然認識というのについて，二千年前の自然認識と現代の自然認識，環境問題との関わりについて，論文を読んで話し合っていました。生活科における自然認識についてやろうと思ったのだけど，そもそもみんな，松木先生，寺尾先生の授業を承けて，生活科とはどんなものかがわかるというのは，似たようなものを分けられる，区別できるということ。深くわかるというのは，似たものと違いがはっきりわかり，その違いがもつ意味や関係性が明確に認識できることです。

たとえば生活科，総合的な学習の時間，総合学習，似

たような言葉がいっぱいあるけど，全部違う。「教科生活基礎」の授業を受講した人は，同じような問題を出したから少しわかっているかもしれません。

●黒板にA ～ Eを書く。

A 生活科

B 総合的な学習の時間

C 総合学習

D 生活単元学習

E 生活単元・問題解決学習

じゃあ，○か×か。生活科は，総合的な学習の時間の，低学年バージョンである，○か×か。○と思う人は手を挙げてください。○。一人！？じゃあ×？はっきり挙げてください。じゃあその他。あれ？○か×かその他のどれかに手を挙げてね。生活科は，総合的な学習の時間の低学年の時の呼び名である。まる。ばつ。三角というか，その他。

これはね，×なんだけど，完全な×というわけでもなくて，総合的な学習の時間でやることの多くを，生活科でもやります。でも，それだけじゃなくって，いろいろな教科の学習の基礎を作っている。自立した学習者にするための基礎を作っている。道徳にもつながっているし，ありとあらゆる小学校の教科，総合的な学習の時間を含めてつながっている。それは寺尾先生のときにもやったね。×なんだけど，実は先生でも，生活科は総合的な学習の時間の低学年バージョンだと思っている人もいます。それくらい生活科というのはよくわかっていない教科なんです。

今週の金曜日，生活科・総合的な学習の時間学会，というのに行きます。一緒に学会を開いているくらい仲良しだよね。ダブっている部分もあるけど違うという感じ。総合的な学習の時間は時間，教科じゃない。生活科は教科なんです。総合的な学習の時間は全国共通の教科書がない。見たこと無いよね。でも昨日行った高校には有りました。「研究」という名前の教科書を作ったそうです。新しい大学入試問題に対応するための論文集などをファイリングした教科書でした。でも普通はないね。みんなが小中学生や高校の頃，教科書無かったでしょ。生活科というのは教科書ありますね。私は，生活科のすべての教科書を持っているので，見たい人には見せてあげますが，マイナーなところでは，信濃教育出版社の教科書を持っています。長野県でしか使われていません。長野県は，自分の県で独自に教科書を作っています。長野県の学校の授業を見に行ったことがある人いますか？伊那小学校見に行ったことがある人。いいですね。（※本学，1学年時，「教科生活基礎」の授業で伊那小学校の公開授業研究会に参加している）

伊那小学校の1，2年生で行われている授業が実は総合学習。で，信濃教育出版社の教科書を見てみたら，伊那小学校でやっているような，やぎの飼育のような中型動物の飼育が書いてあって，伊那小学校と同じ流れが例示してありました。たとえば，名前を決めよう，小屋を作ろう，全部書いてある。個性的です。山羊を飼うためにはどんなことが問題になるのかな？何を食べるのかな？体重をどう測るのかな？そういう疑問の例が書いてあります。

教科書によって違うんです。教科書というと，算数とか，皆教科書を教えると思っていない？生活科の教科書はそんな風には使えません。ザリガニの絵が書いてあって，子どもたちがわーいわーいと嬉しそうにはしゃいでる絵が描いてあるだけです。生活科の教科書は先生がその学習活動で，どんなイメージでやるのかを，子どもと一緒に共有するためのもの。大体こんなことをやるのかなというイメージや見通しを持つためにあります。教科書通りにやっても駄目だし，地域によっては雪だるまを作ろうっていっても，沖縄ではできないね。地域に応じて学習活動を組まないといけない。

でもね実際は学校によって，生活科は何をやるか，1年生のこの時期はこれ，2年生のこの時期はこれみたいに決まっている場合が多いです。考えるのが面倒だから，先輩何をやるんですか？教えてください。これをやるんだよ。一緒にやろうね。田んぼ作りとか，決まっていることが多いです。でも独自にやることもあるね。風やゴムを使ったおもちゃづくりとか。みんなが学校の先生になったら，ぜひいろんな会社の教科書を手に入れて目を通すといいです。いろんな活動が載っていて，自分の県で使っている教科書以外にも色々な学習活動や教材があるんだな，観察シートの書き方も色々あるな，どれがいいのかな，なんて自由に考えてみると，目の前の子どもたちに一番合った活動が，だんだんわかってきます。

生活単元学習。特別支援学校などでやられている学習活動です。中学生なのに，小学校1年生位の計算や漢字の読み書きできないことがあるよね。海外から来たばかりで日本語読めませんとか。通級と言って，その時間だけ来ていることがあるよね。学習進度の差が大きすぎる場合には一緒にできないので，その子にあった，今度遠足に行く持ち物を考えようとか，生活の中の問題に絡めて，実際に問題解決してみたり，その子にあった活動を仕組んでいくということをやっています。小学校3年生だから二桁の掛け算できないといけない，という限定をしてしまうと無理だったりするので，お釣りの計算をさせたりしています。だから学校に行って，特別支援学級に行くと，時間割表に「生活」と書いてある。それは生活科ではなく，生活単元学習です。学校によって名前は違って，たとえば「仲良しのタイム」とかになっていることもあります。

生活単元・問題解決学習，これは戦後，子ども達の学習を一方的に教えるのではなく，生活の中の問題を解決しようという，問題解決型の学習です。でも這いまわる経験主義とか揶揄されて，教科の系統を重視する流れになり，なくなっちゃいました。

●平成10年，20年の生活科の改訂の趣旨や指導要領の対比表などが書いてあるプリント配布

同じような議論で，平成20年度の生活科の学習指導要領改訂の趣旨という所に入ってきている部分があって，生活科の学習指導要領の改定の趣旨のところ，1ページから読んでみてください。改定の経緯。楽しいだけの体験活動になっていて，何を学んでいるのかわからないみたいな批判があるって書いてありますね。

生活科というのは教科なんです。他のは教科じゃない。ちゃんと学習指導要領で目標や，やり方が決められていて，教科書もある教科ですよ。だから卒論のテーマに生活科を選んでもおかしくないですね。専門の教科は生活科ですということもできます。ちゃんと研究すればですけど。ちなみに愛知教育大学には生活科専門の研究室や教室があって，卒論を書いている学生もいます。

まず目標はあまり変わっていない。自然との関わりに関心を持ち，自然認識入っていますね。2番め，自分と身近な動物や植物などの自然とのかかわりに関心を持ち，というころが，赤い波線を引いたのが付け加わっているね。自然の素晴らしさに気づき。自然の素晴らしさってなんだろうね？じゃあちょっとね，グループでディスカッションしてみましょう。今配られたプリントに，1，自然の素晴らしさとは？と書いて，2，3行でいいから自分で考えて書いてごらん。色々な素晴らしさがあるんだけど，小学1，2年生のちびっこたちに気づいてほしい素晴らしさね。そのレベルだぞ。こんなことに気づいてほしいなという先生の思いがないと，栽培活動を行っても，外に散歩に連れて行っても，見えども見えずで何も見えません。

はい，じゃあ書いたかな？まだ書き終わってない人，書いていない方の手を上げて。ちょっと急いで。じゃあ今から，自分以外の他者の考えに触れる時間を取ります。交流または対話あるいはインターラクションといいます。大事なことは，相手の話を鵜呑みにしないこと。へーそうなんだふーん，と聞き流さないで，意味がわからない言葉が出てきたら，それってどういう意味？あとは，具体的ではない場合には，例えば？と訊いてください。もっと詳しく教えて，とか。わかった？というふうにお互いに訊き合って，僕も近くて，とか私も近いんだけどちょっと違ってとか相手の話を本当にわかろうとして聴いてください。順番なんか決めないので，全員発言してください。5分間で，顔を見ながら話をしてください。はいどうぞ。

●グループディスカッション（※山田が聞き取る）

A「雲の綺麗さ，雨が振って，蒸発して，循環。洞窟の中とかの結晶の作り方とか。自分たちがいちから作ろうと思っても作れない。すばらしくない？でも小学校では」

B「朝顔育てるよね。昨日こんだけの長さなのに，今日来たらこんだけになっている。それって植物にしかできない。それとか，それを通して，自分も成長しているのかなとか」

A「何センチ伸びたとか見えないけど，日々の成長を感じさせるとか。」

C「それは目標（3）かな。」

D「それぞれのいろんな生物の，台形，ピラミッド，うまくなってるんだなっていうのが面白い。」

B「赤道直下にしかいないくもとか？」

D「漠然と，ただなんか葉っぱとか，ただ見るんじゃなくって，小さい虫を探してみようというと，はっぱのうらにいたり。生物，自然の中に色々なのがあるんだなって」

B「意外と自分が知らない所に」

C「そう。何でわからないかというと，見る場所がわからないから，見る場所を教えてあげる」

E「理科っぽくないけど，自分に対して，色々人間に与えてくれる。光合成の酸素，雨の水。自然ありがとうみたいな」

F「オゾン層があるから自然から身を守れる」

B「雲を学んでいくやん。それの動機。そういう興味関心」

C「どんな授業をしたら一二年生に伝わる？」

F「むりや。そんな難しいことではなくて，ただ単にBが言ったような植物の成長を見て，生きてるんだって分かればいいんじゃないか。1，2年生の頃は遊んでる記憶しかなくて，すげーって思えばいいんじゃない？俺もわかってないもん。自分がわかってないものを気づかせるってわかる？」

E「すばらしいって感じてる？」

F「俺感じてないもん。綺麗な景色見てきれいだなと思うけど」

B「シロツメクサ，すばらしいやろ」

（※中略　この後もグループディスカッションが続く）

はい，時間なので。どんな話が出たかな？1班さん。

G「四季があること。海とか山とか，生命が溢れている。」

一番後ろはっきり聞こえた？なんて言ったかな？

H「四季の変化と生命，うーん？」

よくわかんなかった？じゃあ立って後ろをを向いて聞こえる声の大きさで伝えてあげてください。

G「四季があることと，草むらの中，海，山に生命が溢れていることです」

今度は聞こえているね。これを教室音量といいます。遠くに言うときに，「わかりましたかー？」子どもにも，大きな声で言うんだよと，小学校の低学年の先生たちは，教室での話し合いの仕方，発表の仕方，話の聞き方なども大切にしています。自立した学習者にするために，小学校で勉強するときにはこうやって発表するんだよ，話を聞くんだよ，聞いたら質問するんだよ，というのを教えます。だからすべての教科に関係ある。学び方を教える。幼稚園は遊びの時間。粘土つくって遊ぼう，砂場で遊ぼう。遊びの中で気づいたことをお話ししてください，

みたいにやっています。話したり，言葉で表現する練習を小学校の前に幼稚園や保育園で先生たちが一生懸命やっています。今度，幼稚園と小学校の接続をやっている先生に来てもらって，いま，連携をどんなことに気をつけて本県は取り組んでいるのか聞いてみましょうね。

では2班さん，教室音量でお願いします。

「自然が私達を活かしてくれたり支えてくれたりすること，リラックスできたり心が穏やかになったり。様々な生き物が共存していること。そこからいろんなことが学べるんじゃないかという意見が出ました。以上です」

癒やされるね。じゃあ，蚊がブンブン舞っている公園は自然ではないのかな？薬を撒けば虫は出てこないけど，それって自然かな？昔は田んぼにイナゴがいて，佃煮を食べてたけど。今はどう？食べたことある？この前，高速道路を走って長野の須坂サービスエリアにイナゴの佃煮売っていたんだけど，お店の人が最近の子どもは食べないんだよって言ってました。いま国内は薬を巻いているので，ホタルもイナゴもいないんだって。だから売っている佃煮のイナゴは中国から輸入してるんだって。勝山出身の人？勝山にはホタルいっぱいいるよね。世界ホタルサミットが開かれた有名な場所です。自慢すべきことなんですよ。

みんな，自然ってなんだろうって話をしたけど，そういう疑問を持つことが大事。動物や植物が出てきたけど，輪ゴムは？自然との関わりの中に輪ゴム出てくるんです。指導要領解説33ページ。こんなふうに書いてあるね。

「ここで言う身近な自然とは，児童を取り巻く自然の中から，児童が自分の遊びの目的に取り出したものである。例えば，樹木，きのみ，石，砂，土，光，影，水，氷，雨，雪，風などの，事物や現象である。また身近にあるものとは，日常生活の中にある様々なものの中で，選び出す事物のことである。例えば，紙，紐，空き袋，空き缶，ペットボトル，牛乳パック，輪ゴム，トレイ，磁石などがある」

だから，輪ゴムを使って何かを飛ばしたり，輪ゴムがつくり出す現象は，自然の現象。自然というのは山とかだけではない。光とか影，あったよね。植物についている水滴がつくり出す，像。上下が反対になっているよ，とか，虹が見えるよ。自然現象っていったらいいかな。そういうことも頭に入れておいてください。動物や植物が，四季の移り変わり，動物植物の多様性と一様性，それも大事だけど，それだけでなくって，虹ができたな，きれいだな，不思議だな。何でものは必ず上から下に落ちるのかな？物が落ちるのも自然現象だね。不思議だね。よく気がついたね。当たり前なんだけど，そういうのが不思議だな，面白いな，と思う子どもを育てないといけない。中学年以降，理科を学ぶときに，不思議，何で，という気持ちに繋がる。理科が生活科と違うのは，規則性まで踏み込んで，科学的に正しいことまで教えないといけないところ。ところが生活科では，不思議だねというところでとどめていても構わないし，理科で言うところの科学的説明とずれていても全然構わないということ。大事なことは，児童が気がついたことを，素晴らしいことに気づいたね。空が何で青いのかな？と聞かれたときに，光の中の成分の屈折率がねという話をするんじゃないってこと。本当だ，空って青いね。不思議だね。夕方になると赤くなるよね。不思議だね，という気持ちに共感し，増幅してあげたり，他と比べて，でも空は青だけじゃないよね，，色々な色があるよね，という気づきを促してあげる。そうだ，そういえば空って黒い時もある，灰色の時もある。何で雲は白いのかな。なんでかな。不思議だね。何で虹はあんな色なのかな。色ってそもそも何なんだろうって疑問に持って行って。色って何か，中学校や高校に行かないとちゃんと習わないんだけど，そんなことはどうでもいい。不思議だな，調べてみたいなという気持ち。そのためには，自分の言葉で表現させて，交流させて，共感を得たり，評価して価値づけをしてあげる。そういう子どもとの対話が小学校の先生には求められるということです。子どもがぼそっと何かをつぶやいたときに，即時的にその気づきの意味や価値を捉えて，みんなにも教えてあげてって，気づきの共有を促す。これは中学2年生のこの学習に繋がるなとか，5年生のここに繋がるぞ，というのを意識して，おもいっきり物語らせるのを大事にする。そのときに科学的に間違ったことは言っちゃダメだ，としたら喋れなくなっちゃう。子どもの説明は間違っていたり，動物と人間，無生物の区別がつかない未分化な状態。ファンタジーが現実のものとして現れている。幼児期の認識の未分化については松木先生も仰っていましたね。

これはね，生活科がデザインされた経緯のひとつと関係があるんだけど，キーワードは児童の発達の未分化。発達上の未分化という児童の認識の特徴があって，子どもがそういう見方をするから，低学年理科よりも生活科の方が児童の豊かな学びにつながるとなったわけです。

低学年理科では，風が強ければ強いほどたくさん動かせるというのを平成10年より前はやっていたんだけれど，そういう狭い範囲に児童の学びや気づきの対象を限定していたんです。子どもはそもそも生物と無生物を区別できない。時計は生物？と聞かれたら，みんなは総合的に判断して，呼吸もしないし，生殖もしない。だから生物ではない。でも子どもは動いているから生物だ。ある一面に注目して，自分と似ているところがあると，いきものと思ってしまう。意思や感情があると思ってしまう。科学的じゃないよね。理科の時間だと，動物や植物，まして時計に話しかけたら，おかしな活動になるね。朝顔さんはしゃべれないでしょ。気持ちはないでしょ。だけど生活科だったらOKなんですよ。教科書の観察シートで児童が「あさがおさん，大きくなってね。ありがとう」って話しかけている事例がありますね。（※教科書の朝顔の観察シートの事例をスクリーンに映す）

こうワークシートに書いても，生活科ならOKです。

科学的じゃないと制限するのではなく，意欲，調べてみたいな，関わりたいな，という気持ちを伸ばすことが大事ということです。

教科書をちょっと見てみようかな。それではね，教科書のコピーを持ってきました。なんて書いてありますか「今日，私の朝顔が二つ咲きました。赤い色でした。咲いてくれてありがとうって話しかけました。わらっているようでした。」これが生活科の自然認識なんですよ。アニミズムだよね。朝顔が言葉を理解していると思っているわけだよね。こんなことを書いてはいけません，朝顔はしゃべらないでしょ，書き直しなさい，なんて先生が言ったら子供たちは自信なくすよね。わかってない子もいれば，分かっている子もいる。表現すること，物語ることを大事にするんだ。「私の朝顔が一つ咲きました。大きくて紫です。毎日水をくれて，ありがとうと笑っていました」みんなが先生だったらなんてコメント書いてあげますか？教科書では教師が赤字で「朝顔の声が聞こえてきたのは素晴らしいですね。心をこめて育てたからですね」みたいにして児童に自信をもたせている。意欲づけしている。科学的に正しいかどうか，科学的，機械論的な自然観に基づいて，朝顔に意思や感情はないよ，ではなく，一生懸命育てたから育ったんだね，嬉しいな，頑張ろうって思えるように関わる。それが生活科の，自然との関わり方なんだということがわかっていないと，こういうコメントは書けません。おもいっきりほめてあげます。3年生位になるとだんだんわかってくるから心配しなくて大丈夫です。

教科書の右側，静かなところのほうが朝顔が安心するよ。教室の近くなら僕も安心だよ。朝顔が安心するって書いてあるね。教科書に載っているのは，こういうイメージ。子どもはこんなことを書きますよ。次，松本健二（※教科書の児童の名前）くんの「やっと芽がでたよ。不思議だな」それにたいする先生の「すごいことにきづいたね」と赤字でコメントが書いてある。植物が芽吹くとき，コンクリートも割って出てくるんだけど，硬い壁を破る力があるということに気付いた。他にもそういう所に目を出す植物いるのかな？先生，コンクリートの所にタンポポ咲いているよ。すごいことにきづいたねということが大事だよ。赤で線を引くときに，波線とか傍線。自分のことが書けているときには1本線，気持ちが書いてあるときには波線とか。なになにみたいだね，というアナロジー表現を推奨する。帽子みたいだね，というメタファーやアナロジーを推奨する。（※中略）

同じ内容でも教科書によって書き方がぜんぜん違うでしょう？いっぱい書いている教科書もあるよね。あとは振り返りカードと言って，1年生から勉強したことを振り返り，書かせている教科書もありますね。栽培したことかな。この次の時間に，紙コップと輪ゴムを使った遊びをやろうと思っているんだけど，そういうことをやったときの気づきの振り返りだね。何か活動をしたら振り返りを書かせて，表現させてみてと言うのはすべての教科の学習に繋がる大事なことだね。幼稚園で音声言語で振り返るけど，小学校では覚えた言葉を使って，表現してみる。表現活動と一体化して生活科の授業があります。改定の経緯にもあったように，体験だけで終わるのではなくて，知的好奇心，科学的な見方・考え方につながるように学習活動を充実させる必要がある。そのために，見つける，比べる，例えるを促す教師の適切な介入，インターベンションや，自己の学びの自覚を促す振り返りとその共有のような学習活動が大事なんですね。

今配ったプリントの裏側を見てください。具体的な活動や体験を通して，気付いたことをもとに多様な学習活動を工夫することと書いてあるよね。だからさっき教科書の中に，見つける，比べる，例えるって書いてあったよね。ほらここにも見つける，比べる，例えるって書いてあるね。こういう意味で学習指導要領が改訂されて，大事にしてほしいということが教科書に書いてある。その強調点がわからないと，たとえば比べると言っても手の大きさと比べているけれど，それだけじゃない。過去。何日か前の朝顔と今を比べたり，自分のと他人のを比べたり，違う種類の植物と比べたり。種（たね）の形，大きさ，模様が違うね，根も違うね。それがまるで何々みたいだね，と例えさせることが大事です。未分化，生物と無生物の区別がつきにくかったり，人と動植物の違いが分からなかったり，動植物の意思や気持ちを考えたり，太陽に顔があったりするアニミズム。自己と他者の区別がつかない。自分だけの世界に入ってしまって，自分は楽しいかもしれないけど，周りの人は困っているよという始点がなかなか持てないです。自己中心的。他者の視点があることがわからないから，交流して，自分と違う考えがあるんだなということに早く気づかせる。1回の授業で気づかせるのではなくて，たくさん経験させることで，いろんな見方考え方があるという事に気づかせる。自分はこれをやりたいけれど，友達はこっちをやりたい。そういうときに喧嘩するのではなく対話させて，皆の意見を聞いて，じゃんけんで決めよう，とか交渉したり，妥協したりして子どもなりの解決策を見出させる。より良い人間関係をつくるのに大切なことですね。道徳や特別活動に近くなるけれど，チャンスを見て，他者の視点を持ついい機会だ，そこで考えさせようと。この時間は算数や理科の時間だと決まっていたら，そんなことをやっている時間はないけれど，生活科では，おもちゃづくりをやっていても，喧嘩がはじまったら，それぞれどう思ったの？どうしたらいい？そういう展開が生活科ではとても大事です。

今日は自然認識という話と，生活科における自然認識は中学年以降の科学的自然認識とは限らないよ，自然というのは動植物だけでなく，物がつくり出す自然現象も含めて自然だと言っているんだよということも含めて，振り返りシートに書いてみてください。（※中略）

第９回　2016/06/16　コップロケット作り（小林２）

机を最初の授業のときのようにグループの配置にしてください。前回と同じように振り返りを書くのですが，書いてある内容があっているか間違っているかではなく，書いてある質と量を考えて評価します。振り返りは今から言う形式で基本的に書いてください。今日はこんなことをしました，そこでこんなことが話題や議論になりました，こんな実験や活動をしました，友達からこんなアドバイスをされた，こんなことを学んだ，自分としてはこんなことを掴みました，大切だということが分かりました，自分が授業をするときにはこんなことを大切にしたい，ということを生活科に関連させて書いてください。何々作りをして楽しかったですではダメなのが分かりますね。

今日は風やゴムを使った動くおもちゃづくりをするので，工夫したことを小学生の気持ちになって書いて。今日はこんなことを工夫したら，こうなったよ，こんなことを見つけたよとかね。科学的に間違っていても構いません。子どもの気持ちになって，こんなことを見つけて気付いた。実際に自然との関わり。ゴムの弾性という自然の事物現象への関わりなんだけれど，それだけに限定しないというのが，低学年理科との違いだったね。低学年理科の時間なら，ゴムの働きについてだけ学ぶと限定されるんだけど，今日は紙コップロケットを飛ばそう，より遠くに飛ばすには？競争して遊ぶなら，記録しなきゃいけないけど，何が必要ですか？基準だったり長さが必要ですね。高さで見るのか距離で見るのか。なんとなくじゃわかんないもんね。そこで数や量への気づきとか，記録撮ったりとか。あとは図画工作，ものを作るということで工作になります。あとはテクノロジー，メカニズム，色々な工夫をすることによって紙コップロケットは遠く，あるいは高く飛びます，そういうのを自分だけじゃなく，グループの中で気づいて，お互いにこうじゃない，とかこうしたらもっと行くんじゃない，理由は？どういう意味？どういうこと？ってわからないときにはお互いにわかるまで訊いて，力を合わせて工夫してみてください。グループの中で最も飛ぶやつを11時までに作ります。11時になったら競争してみたいと思います。

グループで，こういうの作ろうぜ，こうしたらいいんじゃない，というアイディアを出し合って作ってください。

●工作タイム　材料，道具の配布（千枚通しなどを各班に）（※工作タイムの詳細は略）

はい，じゃあ時間です。そこまで。ちょっと話やめてください。他のグループから刺激を受けて改良する時間を上げますから。競い合ってはいるんだけど，賞金商品が出るわけではないので，他のグループの参考にしたいと思ったら聞いていいよ。教えてあげてください。今やってみて気づいたこととか，他のグループがやってるのを見て，気づいたこととかあるかもね。廊下にはいつ行って試してもいいですよ。じゃあ，改良する時間を10分取ります。出歩いてもいいよ。他のグループに行って，どうやって作ったのか訊いてもいいよ。多段式ロケットにしてもいいかというのですが，コップにコップを重ねるならいいですよ。多段式ロケット。いま6班が天井まで1センチの高さまで届いたね。

はい，それではいいかな。あと10分間あるので，小学生になったつもりで，ひらがないっぱいで，コップロケット作りで気づいたこと，工夫したことを，一番優秀な小学生を想像しながら小学生になりきって書いてみよう。自分が生活科の担当の先生だったら，こんなことまで書く優秀な子どもが出てほしいな，というような最高の振り返りを書いてみてください。いろんなことに気づいたはずなんだけど，書かないと忘れちゃうからね。

第10回　2016/06/23　保幼小接続，福井県の取り組み（小林３）

前回書いてもらったみんなの振り返りをみてびっくりしたんですが，いつも私はA評価をあまりつけないのですが，今回一杯つけました。12人も。一杯いて感心したんです。何人かの人に聞いたら，何を書いていいかわからなかったのでという人もいたので，良かった人の抜粋を読んで見るので聞いて参考にしてください。

○○コースAさん「最初切込みを入れるところからはじめました。浅いのと深いのを2つ作りました。紙コップを2つ土台とロケットに使いました。深い切り込みはあまり飛びませんでした。2つだけ重ねて飛ばすともっと高く飛びました。もっと高く飛ばしたかったので，輪ゴムを図のように十字型にしました。もっと重ねていくことができました。するととても高く飛びました。」

○○コースBさんのは，「2倍飛んだよ，30センチ飛んだよ，タイル何枚分とんだよ」みたいに数学や算数に繋がるような数の気付きの書き方をしている所。こういう子どもが出てきたら，こういう書き方は良いねと褒めてあげると真似するのでやってみてください。

○○コースCさん「紙コップと輪ゴムだけでクラス中が夢中になれることがわかった。組み合わせ次第で飛ばなかったり飛んだり，発想によって改良されたり悪くなったりしました。次々に現れる問題に対してどう解決するのか話しあいアドバイスを交わし合うことで，最初はバラバラだったのに最後は一致団結しました。他のグループと競争し，さらに改良する機会があったので，盛り上がりすぎて，他のアイディアを取り入れることができなかった。だから自分が指導するときは，並ばせて一気に飛ばすことで緊張感を出したいと思いました。他の教科と関連させやすい教材だなと思いました。」

○○コースDさん「初めから終わりまで楽しみながらあっという間に過ぎていった。個人作業と違うグループ活動の強みと思う。友達の考えに触発されることで新た

なアイディアが生まれることがたくさんあると，実際に工作することで気付いた。一緒に頑張ることでコミュニケーショ力もつくし，自然を見る力がつくと思った。工作では子どもの発想力を最大限に引き出せるし，楽しんでくれるので充実した授業になると思った。」

「自分のものを改良して飛ばすという繰り返しが子どもたちが自分で考えるトレーニングになっていると思いました。他の授業ではなかなか意見交換をしたり自分で考える経験できないと思いました。生活科は金2の授業で学んだアクティブラーニングを実現できると思いました。30人いれば30通りのアイディアが出るので，それを教師が見逃さないことが大切だと思いました。」

こういう見取るというのが大事で，子どもの学びを見とれるというのは，期待や予想を持って物事を見ないと見えません。だから7月7日に附属小学校に行きますが，小さな気付きやつぶやきも見逃さないぞ，という気持ちで見ないと，ただ遊んでいるようにしか見えません。教師が何をどう仕組んでいるのか，子どもたちがどんな失敗，成功体験をしているのか，見逃さない。傍観するのではなく観察する。もっと事実を学びたいなという気持ちがあって見ないといけない。

あんまりいっぱいみんなの振り返りを紹介すると時間がなくなるので，良いレポートがいっぱいあって，そうだね，例えば，Aさんのレポートのいいところは，人の名前がいっぱい書いてある。Bくんが，Cくんが，と。この友達の自分やグループへの貢献をちゃんと気づいて認めて，価値付けて，振り返りに書いているというのが大事。小学生にも，友達の貢献を書けるような子どもたちを作って欲しいなと思います。振り返りの書き方がわからないと言っていた人，大丈夫ですか？そういう振り返りを書けるように育ててあげる。振り返りを書けるような活動を仕組んで準備してあげないと上手くいかないよ。生活科が上手くできるかどうかというのは，小学校教員の専門性として求められています。特に福井県では保幼小接続というのがとても大事にされています。今求められている，本来の生活科に近づけていく，生活科本来の目標を最大限に引き出して，中学年以降の学習の発展につなげていく，そういう深い学びとかスキルを学ばせるようなところを，できるような教員，そういう教員を目指して福井県は取組を始めています。その最先端に立っているのが，幼児教育支援センターの観先生。今日はプロフェッショナルをお呼びして，こんなふうに見ているんですよ，とか，先生たちが集まって，どうやったら，そういう接続がうまくいくかな，充実するかな，ということについて始まっている取り組み，その話をしてもらいます。福井県の保幼小接続担当のトップの人の話なので，一言一句聞き逃さないように。終わったら質問コーナーを設けるので，どんどん質問してください。

●講義（ゲスト講師：福井県教育庁義務教育課幼児教育支援グループ 福井県幼児教育支援センター主任，觀寿子氏）

（※生活科の様々な実践を紹介　詳細略）

2016/06/30　第11回（大山）

●附属小学校生活科授業参観について

（※参観についての服装等の諸注意の詳細　略）

授業時間中は私語は謹んでください。授業の様子，先生の発話，子どもの様子，反応，つぶやき，つぶさにひろって子ども達の反応を中心に見とっていただけたら良いと思います。子どもには声をかけない。何か言ってきたら，無視するのもあれなので，適当に返してもいいんですが，こちらからちょっかいをかけないでください。

写真などはとらないでください。研究授業のときはそういうこともありますが，今回は参観なのでとらないでください。実際にどんなクラスの様子か，まず見てもらって，先生がどういうキャラクターなのか把握してもらって，授業内容，また振り返ってみてみたいと思います。

●付属小学校の生活科のビデオ視聴（※内容　略）

先ほど1年生は，シャボン玉の授業をやっていました。来週は資料にも書いた授業内容，7月12日に1年生が2年生の前でシャボン玉発表会をやるそうです。実演してみせるということだと思います。それに向けて子ども達がどんな工夫をして，シャボン玉をどう発表しようか，クラスの中で，取組をやるということです。2年生は先ほど小林先生が見せてくれた教科書のようなプラスチックケースに買ったザリガニ，この前子ども達がいっぱいつかめたよって説明してくれていましたが，飼っていて観察しているのかな。それをザリガニってこういう生き物だねって言うことを1年生に教えるのをやるんだそうです。発表ですね。その準備として，グループを作って，どういうことを教えるかを相談して，クラスの中で発表することを来週の木曜日にやるということでした。1，2年生というのは，子ども同士のコミュニケーションがまだ難しいところもありますが，そういう取り組みをするんですね。1年生はまだ自分と先生という会話になって，友達同士は難しいところがありますが，2年生位になると友達同士の会話ができるようになってくるのかな。本当は両方の学年を見られると良いのですが，そういうわけには行かないので，各自自分のクラスを見て，児童の様子をつぶさに観察してほしいなと思います。

ザリガニは3年生の理科につながるんですね。特にアゲハなんて春の時期になると蝶を育てよう。単元があるんですが，そこにつながります。あと大事なことはただ観察するだけでなく発表ですね。教科書ではポスターを作って，気づいたことわかったことを発表することをします。今回はポスターを作るかどうかは聞いていませんが，それに向けて，1年生に教えてあげるということで

なんらかの資料を作っていく作業をやるのかなと思っています。子ども達がたぶん相談しながら発表する内容を決めていくと思うので，どういうことを話しているのか，耳をそばだてて聞き取って欲しいと思います。あとは他にも教科書にこんなふうにアゲハとかトンボだとか蛙だとか，飼育の仕方なども載っています。特に先生方と子どものやり取り，そこら辺を気をつけて，注意して見て欲しいと思います。先生が子どもの何に気づくか，子ども同士で何に気づくか，注意してみてください。事前に小さな紙を渡すので簡単な感想を書いてもらって，自分で作ったメモを再来週に持ち寄ってもらって，グループごとに振り返りを，自分の考え，思ったことを出しあって，それをもとにレポートを作成してもらいます。

2016/07/07　第12回 附属小学校生活科授業参観（大山，大西）

2016/07/14 第13回 お礼の手紙（小林，大山）

●お礼の手紙（小林）

子ども達も体験活動をするとお礼の手紙を書いたりします。国語の学習にもつながっている言語活動なんですけれど，ただ体験するだけでなく，言葉を使って自分の気づきを表現する，お礼の気持を表現するということもやります。それを皆さんも体験してみよう。皆さんは将来先生になってお礼の手紙の書き方を指導するようになるのですから，児童にこんな手紙を書けるようになって欲しいなっていう模範になるような手紙を書いてください。

（※学生は読み手を考えて，お礼の手紙を書く）

●参観を終えてのコメント（大山）

先週は授業参観ご苦労様でした。遅刻する人もいなくて，参観態度も概ね良好でした。附属小の先生からも「非常に良かったです。」という話を聞いています。私たち大学教員は子ども達というより，どちらかというと皆さんの様子を見ていました。参観態度，概ねみなさんきちんとやっていたかなと思いました。本当の子ども達の活動，授業の活動を見る機会はなかなかないと思います。いい機会になったんじゃないかと思いますし，小学校教員の大変さ，例えば最後の方で女の子が泣き出しちゃいましたよね。あの子も普段は落ち着いているんです。普段とちょっと様子が違うので，みなさんがいたからということです。そういうことも意識して欲しいですし，小学校の教員の大変さもそうだけど，小学校の先生って面白そうだなって思った人や，中学校の先生になろうと思っていたけど，小学校も良いなと思った人いませんか。今回の参観が，そういう機会になってくれたら嬉しいです。そして，なんとか小学校の先生を目指して欲しいなと思います。（※　以降第14,15回　省略）

4．おわりに

本稿は拙稿「小学校教員養成カリキュラムの再考Ⅰ－児童の認識の発達に依拠した生活科カリキュラムの再考を通して－」の松木の講義録に続き，生活科における社会認識や，自然認識の発達という視点で，主に寺尾，小林，大山らの講義録から生活科のカリキュラムの在り方を再考する際の知見の抽出を試みた。

本稿の講義録から得られた重要な知見は，1）生活科は理科，社会だけでなく国語，算数，その他全ての教科にも繋がる教科であるということ，2）生活科で問題解決能力の基礎を培うには，なんでと驚いたり，疑問を持ったり，焦点を当ててみたりするところから始めることが求められること，3）空間認識のものさしである廊下などのランドマークを基準として与えると空間の関係性がよく分かり，分かり方の学びに繋がること，4）生活科における自然とは動植物のことだけをいうのではなく，自然の事物・現象も含んでいること，5）生活科における自然認識は，必ずしも3年生以降に学習する理科の科科学的な自然認識でなくて良く，児童の言葉で気付きを物語らせ，他の児童と対話し交流しながら，気付きの質を高めることを優先することの五点である。

参考及び引用文献

（1）平山光義，「エスノグラフィー法による信頼性と妥当性」，平山光義編著，『質的研究法による授業研究－教育学，教育工学，心理学からのアプローチー』，北大路書房，50-69頁，1997年。

（2）小林和雄，松木健一，山田吉英，大山利夫，寺尾健夫，橋本康弘，大西将史，「小学校教員養成カリキュラムの再考Ⅰ　－児童の認識の発達に依拠した生活科カリキュラムの再考を通して－」，『初等教育研究第2号』，福井大学教育学部，113-132頁，2017。

Reconsideration about Curriculum for Elementary School Teachers'Training II
－Through Reconsideration about Curriculum for "Living Environment Studies"
based on Children's social and natural scientific Cognitive Development－

Kobayashi Kazuo and Matsuki Ken-ichi and Yamada Yoshihide and Oyama Toshio and Terao Takeo and Hashimoto Yasuhiro and Onishi Msashi

Key words：Living Environment Studies, Elementary School Education, Curriculum, social and natural scientific Cognitive Development, Lesson Records